

ドキュメンタリービデオ

ハンモックの埋葬

ベネズエラ、サンミジャンにおけるカーニバル儀礼

日本語対訳

ベネズエラ、カリブ海岸の港町、プエルトカベージョ。
この町のなかで、もっとも民衆文化のさかんな地区として知られるサンミジャンに、「ハンモックの埋葬」と呼ばれるカーニバル儀礼が伝承されている。ハンモックの埋葬は祭りの路上でおこなわれる悲喜劇的パフォーマンスである。

物語は、カーニバルの月曜の夜はじまる。

ある男の死を告げる伝令が走る――。

通夜のはじまりだ。丸太にくくりつけられた花柄のハンモックのなかに、男のなきがらが入っているとされる。

スキヤクワの音、太鼓のリズム、もの悲しく無気味な角笛の調べとともに、亡骸を包んだハンモックが、町内をねりあ
るく。

あくる火曜の午後、男のなきがらが埋葬される。

仮装した女たちが、ハンモックを担ぐ。男の死を嘆く愛人たちの役柄である。男は、数おおくの女性から慕われる艶福家であったという設定なのだ。

埋葬に先だち、葬列はプエルトカベージョ市内を、ねりあ
るく。

「死んじまったよー。葬らにゃならぬ」

人びとは口ぐちに歌う。

ひとりの男がハンモックに近づき、木刀で打ちつける。女
たちは泣き崩れる。男たちは木刀で激しく打ちあう。

この急展開は、嫉妬に狂った男がひきおこした乱闘騒ぎと
いう設定だ。嘆き悲しむ女たちの輪のなかに、自分の妻の姿
を見とがめた男がいたのである。怒れる男たちはクラサオの
言語 パピアメント で雄たけびをあげる。

太鼓のリズムが変化し、激しく乱打されると乱闘は収まり、
踊りがはじまる。

このようなパフォーマンスをくりかえしながら、パレード
はプエルトカベージョ市内を一巡する。

陽が落ちるころ、葬列はサンミジャンに戻りつく。

祭りのフィナーレは埋葬儀礼だ。埋葬という言葉とは裏腹
に、ハンモックは、古くからこの儀礼の中心であったピトレ
家の屋根の上に掲げられ、幕切れとなる。

この風変わりな儀礼の起源は、スペインに古くから伝わる

「カーニバルの埋葬儀礼」であるとする説が存在する。しかしサンミジャンの人びとにとって、ハンモックの埋葬は、オランダ領カリブの島クラサオ伝来の芸能である。

—— 談： ヘルマン・ビジャヌエバ ——

ハンモックの埋葬の伝統について語るには、このコミュニティの歴史をさかのぼらなければなりません。それは、オランダ系植民地の文化とベネズエラ文化の出会い、すなわちクラサオ島の人びととプエルトカベージョの人びと——とくにサンミジャンの住民——との出会いの歴史なのです。密輸を含む貿易による交流により、ふたつの地域の人びとは接近したのです。そしてクラサオ出身者がハンモックの埋葬の伝統をサンミジャンに伝えたのです。

1999年1月17日、地域の長老ビビアーノ・ピトレが亡くなった。ピトレ家はクラサオ島出身の家系で、ビビアーノはハンモックの埋葬における精神的リーダーだった。

—— 談： 故ビビアーノ・ピトレ ——

ハンモックの埋葬には、自分が死なないかぎり、終わりはないんだ。うちの親父は先駆者のひとりだったが、俺がそれを継いだ。俺のあとには息子たちがいる。ハンモックの埋葬そのものにはけっして終わりはない。だから「命も尽きて、祭りも終わり」と言われるのさ。それ以外の理由でハンモックの埋葬が終わることはない。

1999年のカーニバルに先立って、サンミジャンの人びとは、会合を持ち、亡きビビアーノの遺志を次世代に継承することを誓いあった。

— スピーチ： ヘルマン・ビジャヌエバ —

これから私たちは新世代として歩みはじめなければなりません。この新世代は今日この時から責任を負うことになります。ここでは、ビビアーノ・ピトレに代わる人が誰かひとりだけいるというわけではありません。われわれひとりひとりの誰もがビビアーノ・ピトレなのです。私はここにいる全員にこの責任を担ってほしい。

サンミジャンの人びとにとって、現在、ハンモックの埋葬は地域住民としての誇りの源泉になっている。

— 談： エネイダ・エレラ —

私の人生にとってハンモックの埋葬はとても大切なものなんです。だって、本当に自分の奥底にあるものですもの。だから守っていきたい。ぜったいに失いたくないものなのです。私たちが今しているみたいに、これらもずっと伝統にしたがってハンモックの埋葬を継承し、守りつづけてつづけてほしい。素晴らしい伝統なんですから。

— 談： ルイス・パラビシーニ —

私には男の子が4人いますが、上から2番目が、今年から祭りに参加したいと言いだしたんです。私は息子に言ってやりました。「今年から、俺が身につけたことをお前が身につける番だ。親父よりもっと詳しくなって、いつかおまえの子どもにも教えてやるんだ」。あいつが今年から私たちと一緒に祭りに参加してくれるなんて、ほんとうにうれしいです。

——（インタビュー）二世のデビューってことですね！

— 談： ジョレイサ・モレーノ —

子供たちに、教えこむんです。私が参加できなくなったら、あなたたちが率先して私の代役を果たさなきゃいけないって。どんなことをしてでも、この祭りが衰えることなく年々発展しつづけるように。私たち自身が投影されていると思って、規律と敬意をもって参加し、みんながひとつになるように。

こうした各個人の気持ちを、ひとつに団結させるため、パレードの前夜「祭り仲間の誓い」と呼ばれる儀礼が行われる。サンミジャンの中心にあたる十字路にハンモックが安置され、この儀礼によせる思いと伝統を継承する決意を、人びとはひとりずつ表明する。

翌日火曜日、パレードの出発にさきだち、この決意は再確認される。

— 祭り仲間の誓い —

一同注目！

今年もまたサンミジャンでは、国内外の多くの友人たちを迎えて、ハンモックの埋葬がはじまります。今年でこの祭りは127年目を迎えます。この伝統がこれからも続いてゆくように、誓いをたてましょう。この祭りが継承されるためにはわれわれひとりひとりの参加態度が重要になります。

ひとつだけ約束があります。それは、「歌おう、楽しもう、でも節度を保って」ということです。この祭りは気違い騒ぎではありません。ここには狂人はひとりもいないはずです。警察や軍隊から「迷惑行為」をとがめられ、制圧されたり留置されたりする、そんな必要はないはずです。われわれには理性があるのですから。この伝統がわれわれの世代で断絶することがないようにしましょう。

では、みなさん、宣誓しましょう。全員右手を挙げて！

「ハンモックの埋葬の伝統を守りつづけることを誓いますか？」

——「誓います！」

「他人に迷惑をかけないことを誓いますか？」

——「誓います！」

「さあ、出発だ！」

「死んじまったよー」

——「葬らにやならぬ！」

こうして各人の思いは共有され、集団の意思となる。

ベラと呼ばれる木刀を使った荒々しい殺陣^{たて}はパレードの花形のひとつである。その暴力的イメージゆえに、ベラの打ちあいは、かつて市内の人びとから恐れられることもあった。

しかしパフォーマンスの荒々しさとは裏腹に、実際のベラの殺陣は、周到なりハーサルと準備のもとにおこなわれる。それは若い世代への技の伝承の場でもあり、芸能を通じた社会教育の機能を果たしている。

ベラの打ちあいが男性の領域だとすれば、女性の領域はハンモックそのものにかかわる。

祭りにさきだち、地域の女性たちは寄りあってハンモックを新調する。祭りの最中、ハンモックを担ぐのも、主として女性の役割である。

さまざまな共同作業、技の伝承、精神的団結……。

こうした集団の力の結集によって、ハンモックの埋葬儀礼は成立している。

サンミジャンの人びとにとってハンモックの埋葬は、もっとも自分らしさを感じられるイベントだという。

— 談： イスラエル・クロケル —

ハンモックの埋葬ほど、大事なものはないね。プエルトカベージョの代表としてハンモックの埋葬をやる。これほど大切なことはほかにない。俺たちが感じるもの、血のなかに受けついであるものだから。ハンモックの埋葬は馬鹿騒ぎじゃない。俺たちの血に流れつづけている、一番大切なものだから。ハンモックの埋葬とともにサンミジャンの民俗文化を表現しているんだ。

— 談： イドリーサ・モレーノ —

小さいときからハンモックの埋葬は、代々続いた伝統だと教えられてきました。だから私は、いつも自分の知ってることすべてを表現するようにします。若い世代がこの伝統を身につけて、私たちの伝統を継承するように。そうして、いつまでも絶えることがないように。そう、いつまでも……。

— 談： アレハンドロ・ロペス —

なにがうれしいって、自分の参加していることが、他に例のないものだと思ったときだろう。自分自身が特別な存在みたいに感じるじゃないか。俺がサンミジャン出身だってことを知ると、まわりの連中はきまって訊くよ。「おまえ、サンミジャンの生れか？ じゃあハンモックの祭り仲間なんだろう？」って。そんなとき「まあな」って答えるのは、いい気分だけ。

サンミジャンに住んでいながら、ハンモックの埋葬が嫌いな奴のことを、どう言ったらいいんだろう……だって、ハンモックの埋葬は俺たち自身なんだから。

この祭りを、過去から現在、現在から未来へと継承してゆくことは、人びとにとって他に代えがたい誇りの源泉なのだ。

テクニカルデータ

制作・監督・脚本・現地調査・スチル写真
石橋 純

撮影

マヌエル・アルバレス
アルマンド・シルバ

編集

石橋 純
アルマンド・シルバ
マヌエル・アルバレス

ナレーション

ギジェルモ・カラスコ

現地取材

1999年2月 プエルトカベージョ

ポストプロダクション

1999年7月 東京大学 大学院総合文化研究科
8月 イラ・フィルムス(カラカス)
アロンサウンド・スタジオ(カラカス)

撮影機材

Sony DCR-VX200、DCR-VX1000

編集システム

Sony Media 100、Rapid Razor 2.0

マスタリング

Sony UWM-1800

第 22 回 (2000 年度) 米国ラテンアメリカ学会 (LASA) 映画祭優秀賞
(Award for Merit) 受賞作品

この作品は財団法人トヨタ財団による研究助成資金の支給を受けて制作されました。記して謝意を表します。

© 2000 石橋 純 / サンミジャン民俗文化救済会